茸の舞姫

泉鏡花

一

「杢(もく)さん、これ、何(なあに)？……」

と小児(こども)が訊(き)くと、真赤(まっか)な鼻の頭(さき)を撫(な)でて、

「綺麗な衣服(べべ)だよう。」

これはまた余りに情(なさけ)ない。町内の杢若(もくわか)どのは、古筵(ふるむしろ)の両端へ、笹(ささ)の葉ぐるみ青竹を立てて、縄を渡したのに、幾つも蜘蛛(くも)の巣を引搦(ひっから)ませて、商売(あきない)をはじめた。まじまじと控えた、が、そうした鼻の頭(さき)の赤いのだからこそ可(よ)けれ、嘴(くちばし)の黒い烏だと、そのままの流灌頂(ながれかんちょう)。で、お宗旨違(ちがい)の神社の境内、額の古びた木

の鳥居の傍（かたわら）に、裕福な仕舞家（しもたや）の土蔵の羽目板を背後（うしろ）にして、秋の祭礼（まつり）に、日南（ひなた）に店を出している。

売るのであろう、商人（あきんど）と一所に、のほんと構えて、晴れた空の、薄い雲を見ているのだから。

飴（あめ）は、今でも埋火（うずみび）に鍋（なべ）を掛けて暖めながら、飴ん棒と云う麻殻（あさがら）の軸に巻いて売る、賑（にぎや）かな祭礼でも、寂（さ）びたもので、お市、豆捻（まめねじ）、薄荷糖（はっかとう）なぞは、お婆さんが白髪（しらが）に手拭（てぬぐい）を巻いて商う。何でも買いなの小父さんは、紺の筒袖を突張（つっぱ）らかして懐手の黙然（もくねん）たるのみ。景気の好（い）いのは、蜜垂（みつたらし）じゃ蜜垂じゃと、菖蒲団子（あやめだんご）の附焼を、はたはたと煽（あお）いで呼ばるる。……毎年顔も店も馴染（なじみ）の連

中、場末から出る際商人（きわあきんど）。丹波鬼灯（たんばほおずき）、海酸漿（うみほおずき）は手水鉢（ちょうずばち）の傍（わき）、大きな百日紅（さるすべり）の樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、気まぐれに山から出て来た、もの売で。——

　売るのは果もの類。桃は遅い。小さな梨、粒林檎（つぶりんご）、栗（くり）は生のまま……うでたのは、甘藷（さつまいも）とともに店が違う。……奥州辺とは事かわって、加越（かえつ）のあの辺に朱実（あけび）はほとんどない。ここに林のごとく売るものは、黒く紫な山葡萄（やまぶどう）、黄と青の山茱萸（やまぐみ）を、蔓（つる）のまま、枝のまま、その甘渋くて、且つ酸（すっぱ）き事、狸が咽（む）せて、兎が酔いそうな珍味である。

このおなじ店が、筵三枚、三軒ぶり。笠被た女が二人並んで、片端に頬被りした馬士のような親仁が一人。で、一方の端の所に、件の杢若が、縄に蜘蛛の巣を懸けて罷出た。

「これ、何さあ。」

「美しい衣服じゃが買わんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳になる……杢の年紀が分らない。小児の時から大人のようで、大人になっても小児に斉しい。彼は、元来、この町に、立派な玄関を磨いた医師のうちの、書生兼小使、と云うが、それほどの用には立つまい、ただ大食いの食客。

世間体にも、容体にも、痩(や)せても袴(はかま)とある処(ところ)を、毎々薄汚れた縞(しま)の前垂(まえだれ)を〆(し)めていたのは食溢(くいこぼ)しが激しいからで――この頃は人も死に、邸(やしき)も他(よそ)のものになった。その医師(いしゃ)というのは、町内の小児(こども)の記憶に、もう可なりの年輩だったが、色の白い、指の細く美しい人で、ひどく権高な、その癖婦(おんな)のように、口を利くのが優しかった。……細君は、赭(あか)ら顔、横ぶとりの肩の広い大円髷(おおまるまげ)。眦(めじり)が下って、脂(あぶら)ぎった頬(ほお)へ、こう……いつでもばらばらとおくれ毛を下げていた。下婢(おさん)から成上ったとも言うし、妾(めかけ)を直したのだとも云う。実(まこと)の御新造(ごしんぞ)は、人づきあいはもとよりの事、門(かど)、背戸へ姿

を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まった処に籠切(こもりき)りの、長年の狂女であった。——で、赤鼻は、章魚(たこ)とも河童(かっぱ)ともつかぬ御難なのだから、待遇(あつかい)も態度(なりふり)も、河原の砂から拾って来たような体(てい)であったが、実は前妻のその狂女がもうけた、実子で、しかも長男で、この生れたて変なのが、やや育ってからも変なため、それを気にして気が狂った、御新造は、以前、国家老の娘とか、それは美しい人であったと言う……

ある秋の半ば、夕(ゆうべ)より、大雷雨のあとが暴風雨(あらし)になった、夜の四つ時十時過ぎと思う頃、凄(すさま)じい電光の中を、蜩(ひぐらし)が鳴くような、うらさみしい、冴(さ)えた、透(とお)

る、女の声で、キイキイと笑うのが、あたかも樹の上、雲の中を伝うように大空に高く響いて、この町を二三度、四五たび、風に吹廻されて往来（ゆきき）した事がある……通魔（とおりま）がすると恐れて、老若、呼吸（いき）をひそめたが、あとで聞くと、その晩、斎木（医師の姓）の御新造が家（うち）を抜出し、町内を彷徨（さまよ）って、疲れ果てた身体（からだ）を、社（やしろ）の鳥居の柱に、黒髪を颯（さっ）と乱した衣（きぬ）は鱗（うろこ）の、膚（はだえ）の雪の、電光（いなびかり）に真蒼（まっさお）なのが、滝をなす雨に打たれつつ、怪しき魚（うお）のように身震（みぶるい）して跳ねたのを、追手（おって）が見つけて、医師（いしゃ）のその家へかつぎ込んだ。間もなく柩（ひつぎ）という四方張（ばり）の俎（まないた）に載（の）せて焼かれてしまった。斎木の御新造

は、人魚になった、あの暴風雨（あらし）は、北海の浜から、潮（うしお）が迎いに来たのだと言った――

その翌月、急病で斎木国手が亡くなった。あとは散々（ちりぢり）である。代診を養子に取立ててあったのが、成上りのその肥満女（ふとっちょ）と、家蔵（いえくら）を売って行方知れず、……下男下女、薬局の輩（ともがら）まで。勝手に摑（つか）み取りの、梟（ふくろう）に枯葉で散り散りばらばら。……薬臭い寂しい邸は、冬の日売家の札が貼（は）られた。寂（しん）とした暮方、……空地の水溜（みずたまり）を町の用心水（ようじんみず）にしてある掃溜（はきだめ）の芥棄場（ごみすてば）に、枯れた柳の夕霜に、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提灯（ちょうちん）のごとくぶら下げて立っていたのは、屋根から落ちたか、

杢若(もくわか)どの。……親は子に、杢介とも杢蔵とも名づけはしない。待て、御典医であった、彼のお祖父(じい)さんが選んだので、本名は杢之丞(もくのじょう)だそうである。

——時に、木の鳥居へ引返そう。

二

ここに、杢若がその怪しげなる蜘蛛(くも)の巣を拡げている、この鳥居の向うの隅、以前医師(いしゃ)の邸の裏門のあった処に、むかし番太郎と言って、町内の走り使人(つかい)、斎(とき)、非時の振廻(ふれまわ)り、香奠(こうでん)がえしの配歩(くばりある)行き、秋の夜番、冬

は雪掻の手伝いなどした親仁が住んだ……半ば立腐りの長屋建て、掘立小屋という体なのが一棟ある。

町中が、杢若をそこへ入れて、役に立つ立たないは話の外で、寄合持で、ざっと扶持をしておくのであった。

「杢さん、どこから仕入れて来たよ。」

「縁の下か、廂合かな。」

その蜘蛛の巣を見て、通掛りのものが、苦笑いしながら、声を懸けると、……

「違います。」

と鼻ぐるみ頭を掉って、

「さとからじゃ、ははん。」と、ぽんと鼻を鳴らすような咳払(せきばらい)をする。此奴(こいつ)が取澄ましていかにも高慢で、且つ翁寂(おきなさ)びる。争われぬのは、お祖父さんの御典医から、父典養に相伝して、脈を取って、卜小指を刎(は)ねた時の容体と少しも変らぬ。

杢若が、さとと云うのは、山、村里のその里の意味でない。註をすれば里よりは山の義で、字に顕(あらわ)せば故郷(ふるさと)になる……実家(さと)になる。

八九年前(ぜん)晩春の頃、同じこの境内で、小児(こども)が集(あつま)って凧(たこ)を揚げて遊んでいた――杢若は顱(はち)の大きい坊主頭で、誰よりも群を抜いて、のほんと脊が高いのに、その揚

げる凧は糸を惜（おし）んで、一番低く、山の上、松の空、桐の梢（こずえ）とある中に、わずかに百日紅（さるすべり）の枝とすれすれな所を舞った。

　　大風来い、大風来い。
　　　小風は、可厭（いや）、可厭……

幼い同士が威勢よく唄う中に、杢若はただ一人、寒そうな懐手、糸巻を懐（ふところ）中に差込んだまま、この唄にはむずむずと襟を摺（す）って、頭（かぶり）を掉（ふ）って、そして面（つら）打って舞う己（おの）が凧に、合点合点をして見せていた。

……にもかかわらず、鳥が騒ぐ逢魔（おうま）が時、颯（さつ）と下した風も無いのに、杢若のその低い凧が、懐の糸巻をく

るりと空に巻くと、キリキリと糸を張って、一ツ星に颯と外（そ）れた。

「魔が来たよう。」

「天狗（てんぐ）が取ったあ。」

ワッと怯（おび）えて、小児（こども）たちの逃散る中を、団栗（どんぐり）の転がるように杢若は黒くなって、凧の影をどこまでも追掛（おっか）けた、その時から、行方知れず。

五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの凧を提げて、やっぱり鳥居際にぼんやりと立っていた。天狗に攫（さら）われたという事である。

それから時々、三日、五日、多い時は半月ぐらい、

月に一度、あるいは三月に二度ほどずつ、人間界に居なくなるのが例年で、いつか、そのあわれな母のそうした時も、杢若は町には居なかったのであった。

「どこへ行ってござったの。」

町の老人が問うのに答えて、

「実家（さと）へだよう。」

と、それ言うのである。この町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰続きを分入るに相違ない、魔の棲（す）むのはそこだと言うから。

「お実家（さと）はどこじゃ。どういう人が居さっしゃる。」

「実家の事かねえ、ははん。」

スポンと栓を抜く、件(くだん)の咳(せきばらい)を一つすると、これと同時に、鼻が尖(とが)り、眉が引釣(ひっつ)り、額の皺(しわ)が縊(くび)れるかと凹(へこ)むや、眼(まなこ)が光る。……歯が鳴り、舌が滑(なめらか)に赤くなって、滔々(とうとう)として弁舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩(もら)す——これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母(おおじおおば)も、その児(こ)、孫などには、決して話さなかった。

幼いものが、生意気に直接(じか)に打撞(ぶつか)る事がある。

「杢やい、実家(さと)はどこだ。」

「実家の事かい、ははん。」

や、もうその咳(せきばらい)で、小父さんのお医師(いしゃ)さんの、膚触(はだざわ)りの柔かい、冷(ひや)りとした手で、脈所をぎゅうと握

られたほど、悚然（ぞっ）とするのに、たちまち鼻が尖（とが）り、眉が逆立ち、額の皺（しわ）が、ぴりぴりと蠢（うごめ）いて眼が血走る。

……

聞くどころか、これに怯（おび）えて、ワッと遁（に）げる。

「実家はな。」

と背後（うしろ）から、蔽（おお）われかかって、小児（こども）の目には小山のごとく追って来る。

「御免なさい。」

「きゃっ！」

その時に限っては、杢若の耳が且つ動くと言う——

嘘を吐（つ）け。

三

海、また湖へ、信心の投網（とあみ）を颯（さつ）と打って、水に光るもの、輝くものの、仏像、名剣を得たと言っても、売れない前（さき）には、その日一日の日当がどうなった、米は両につき三升、というのだから、かくのごとき杢若が番太郎小屋にただぼうとして活（い）きているだけでは、世の中が納まらぬ。

入費は、町中持合いとした処で、半ば白痴（はくち）で――たといそれが、実家（さと）と言う時、魔の魂が入替るとは言え

——半ば狂人（きちがい）であるものを、肝心火の元の用心は何とする。……炭団（たどん）、埋火（うずみび）、榾（ほだ）、柴（しば）を焚（た）いて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、杢若は切凧（きれだこ）の一件で、山に実家（さと）を持って以来、いまだかつて火食をしない。多くは果物を餌（えさ）とする。松葉を嚙（か）めば、椎（しい）なんぞ葉までも頬張る。瓜（うり）の皮、西瓜（すいか）の種も差支えぬ。桃、栗、柿、大得意で、鳥や鳶（とび）は、むしゃむしゃと裂いて鱠（なます）だし、蝸牛虫（まいまいつぶろ）やなめくじは刺身に扱う。春は若草、薺（なずな）、茅花（つばな）、つくつくしのお精進……蕪（かぶ）を嚙（かじ）る。牛蒡（ごぼう）、人参は縦に啣（くわ）える。

この、秋はまたいつも、食通大得意、というものは、

木の実時なり、実り頃、実家の土産の雉、山鳥、小雀、山雀、四十雀、色どりの色羽を、ばらばらと辻に撒き、廂に散らす。ただ、魚類に至っては、金魚も目高も決して食わぬ。

最も得意なのは、も一つ茸で、名も知らぬ、可恐しい、故郷の峰谷の、蓬々しい名の無い菌も、皮づつみの餡ころ餅ぼたぼたと覆すがごとく、袂に襟に溢れさして、山野の珍味に厭かせたまえる殿様が、これにばかりは、露のようなよだれを垂し、

「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味ぞのッ。」

は凄じい。

が、かく菌を嗜むせいだろうと人は言った、まだ杢若に不思議なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、陰では、汚れたどろどろの衣の縞目も判明する。……委しく言えば、昼は影法師に消ていて、夜は明かなのであった。

さて、店を並べた、山茱萸、山葡萄のごときは、この老舗には余り資本が掛らな過ぎて、恐らくお銭になるまいと考えたらしい。で、精一杯に売るものは。

「何だい、こりゃ！」

「美しい衣服じゃがい。」

氏子は呆（あき）れもしない顔して、これは買いもせず、貰いもしないで、隣の木の実に小遣（こづかい）を出して、枝を蔓（つる）を提げるのを、じろじろと流眄（ながしめ）して、世に伯楽なし矣（い）、とソレ青天井を向いて、えへらえへらと嘲笑（あざわら）う……

その笑（わらい）が、日南（ひなた）に居て、蜘蛛の巣の影になるから、鳥が嘴（くちばし）を開けたか、猫が欠伸（あくび）をしたように、人間離れをして、笑の意味をなさないで、ぱくりとなる……

というもので、筵（むしろ）を並べて、笠を被（かぶ）って坐った、山茱萸、山葡萄の婦（おんな）どもが、件（くだん）のぼやけさ加減に何となく誘われて、この姿も、またどうやら太陽（ひ）の色に朧々（おぼろおぼろ）として見える。

蒼(あお)い空、薄雲よ。

人の形が、そうした霧の裡(なか)に薄いと、可怪(あやし)や、掠(かす)れて、明(あから)さまには見えない筈(はず)の、扱(しご)いて搦(から)めた縺(もつ)れ糸の、蜘蛛の囲(い)の幻影(まぼろし)が、幻影が。

真綿をスイと繰ったほどに判然と見えるのに、薄紅(うすべに)の蝶、浅葱(あさぎ)の蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金糸銀糸や消え際の草葉蜉蝣(くさばかげろう)、金亀虫(こがねむし)、蠅の、蒼蠅、赤蠅。羽ばかり秋の蟬、蜩(ひぐらし)の身の経帷子(きょうかたびら)、いろいろの虫の死骸(しがい)ながら巣を引揺(ひんむし)って来たらしい。それ等が艶々(つやつや)と色に出る。

あれ見よ、その蜘蛛の囲に、ちらちらと水銀の散っ

た玉のような露がきらめく……

　この空の晴れたのに。――

四

　これには仔細（しさい）がある。

　神の氏子のこの数々の町に、やがて、あやかしのあろうとてか――その年、秋のこの祭礼（まつり）に限って、見馴（みな）れない、商人（あきゅうど）が、妙な、異（かわ）ったものを売った。

　宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立った、白い幟（のぼり）の下に店を出して、そこに鬻（ひさ）ぐは何等のものぞ。

河豚(ふぐ)の皮の水鉄砲。

蘆(あし)の軸に、黒斑(くろぶち)の皮を小袋に巻いたのを、握って離すと、スポイト仕掛けで、衝(ツッ)と水が迸(ほとばし)る。

鰒(ふぐ)は多し、また壮(さかん)に膳(ぜん)に上す国で、魚市は言うにも及ばず、市内到る処の魚屋の店に、春となると、この怪(あやし)い魚(うお)を鬻(ひさ)がない処はない。

が、おかしな売方、一頭々々(ひとつひとつ)を、あの鰭(ひれ)の黄ばんだ、黒斑なのを、ずぼんと裏返しに、どろりと脂ぎって、ぬらぬらと白い腹を仰向(あおむ)けて並べて置く。

もしただ二つ並ぼうものなら、切落して生々しい女の乳房だ。……しかも真中(まんなか)に、ズキリと庖丁目を入れ

た処が、パクリと赤黒い口を開(あ)いて、西施(せいし)の腹の裂目を曝(さら)す……

中から、ずるずると引出した、長々とある百腸(ひゃくひろ)を、巻かして、束(つか)ねて、ぬるぬると重ねて、白腸(しろわた)、黄腸(きわた)と称(とな)えて売る。……あまつさえ、目の赤い親仁(おやじ)や、襤褸半纏(ぼろばんてん)の漢等(おのこら)、俗に——云う腸(わた)拾いが、出刃庖丁を斜に構えて、この腸(はらわた)を切売する。

待て、我が食通のごときは、これに較ぶれば処女の膳であろう。

要するに、市、町の人は、挙(こぞ)って、手足のない、女の白い胴中(どうなか)を筒切(つつぎり)にして食うらしい。

その皮の水鉄砲。小児(こども)は争って買競(かいきそ)って、手の腥(なまぐさ)いのを厭(いと)いなく、参詣(さんけい)群集の隙(すき)を見ては、シュッ。

「打上げ！」

「流星！」

と花火に擬(まね)て、縦横(たてよこ)や十文字。

いや、隙どころか、件(くだん)の杢若をば侮(あなど)って、その蜘蛛の巣の店を打った。

白玉の露はこれである。

その露の鏤(ちりば)むばかり、蜘蛛の囲に色籠(こ)めて、いで膚寒(はだざむ)き夕(ゆうべ)となんぬ。山から颪(おろ)す風一陣。

はや篝火(かがりび)の夜にこそ。

五

笛も、太鼓も音（ね）を絶えて、ただ御手洗（みたらし）の水の音。寂（しん）としてその夜（よ）更け行く。この宮の境内に、階（きざはし）の方（かた）から、カタンカタン、三ツ四ツ七ツ足駄の歯の高響（たかひびき）。

脊丈のほども惟（おも）わるる、あの百日紅（さるすべり）の樹の枝に、真黒（まっくろ）な立烏帽子（たてえぼし）、鈍色（にぶいろ）に黄を交えた練衣（ねりぎぬ）に、水色のさしぬきした神官の姿一体。社殿の雪洞（ぼんぼり）も早や影の届かぬ、暗夜（やみ）の中に顕（あらわ）れたのが、やや屈（かが）みなりに腰を捻（ひね）って、その百日紅の梢（こずえ）を覗（のぞ）いた、霧に朦朧（もうろう）と火が映って、

ほんのりと薄紅(うすくれない)の射(さ)したのは、そこに焚落(たきおと)した篝火(かがりび)の残余(なごり)である。

この明(あかり)で、白い襟、烏帽子の紐(ひも)の縹色(はないろ)なのがほのかに見える。渋紙した顔に黒痘痕(くろあばた)、塵(ちり)を飛ばしたようで、尖(とん)がった目の光、髪はげ、眉薄く、頬骨の張った、その顔容(かおかたち)を見ないでも、夜露ばかり雨のないのに、その高足駄の音で分る、本田摂理(せつり)と申す、この宮の社司で……草履か高足駄の他(ほか)は、下駄を穿(は)かないお神官(かんぬし)。

小児(こども)が社殿に遊ぶ時、摺違(すれちが)って通っても、じろりと一睨(ひとにら)みをくれるばかり。威あって容易(たやす)く口を利かぬ。それを可恐(こわ)くは思わぬが、この社司の一子に、時丸と

云うのがあって、おなじ悪戯盛（いたずらざかり）であるから、ある時、大勢が軍（いくさ）ごっこの、番に当って、一子時丸が馬になった、叱（しっ）！　騎（の）った奴（やつ）がある。……で、廻廊を這（は）った。

大喝一声、太鼓の皮の裂けた音して、

「無礼もの！」

社務所を虎のごとく猛然として顕（あらわ）れたのは摂理の大人（うし）で。

「動！」と喚（わめ）くと、一子時丸の襟首を、長袖のまま引摑（ひっつか）み、壇を倒（さかしま）に引落し、ずるずると広前を、石の大鉢の許（もと）に摑（つか）み去って、いきなり衣帯を剝（は）いで裸にすると、天窓（あたま）から柄杓（ひしゃく）で浴びせた。

「塩を持て、塩を持て。」
塩どころじゃない、百日紅の樹を前にした、社務所と別な住居から、よちよち、臀を横に振って、肥った色白な大円髷が、夢中で駈けて来て、一子の水垢離を留めようとして、身を楯に逸るのを、仰向けに、ドンと蹴倒いて、

「汚れものが、退りおれ。――塩を持て、塩を持てい。」

いや、小児等は一すくみ。

あの顔一目で縮み上る……

が、大人に道徳というはそぐわぬ。博学深識の従七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。

「火を、ようしめせよ、熾（おき）が散るぞよ。」

と烏帽子を下向けに、その住居（すまい）へ声を懸けて、樹の下を出しなの時、

「雨はどうじゃ……ちと曇ったぞ。」と、密（そ）と、袖を捲（ま）きながら、紅白の旗のひらひらする、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れてはならぬが、降りもせまいかな。」

と半ば呟（つぶや）き呟き、颯（さっ）と巻袖の笏（しゃく）を上げつつ、とこう、石の鳥居の彼方（かなた）なる、高き帆柱のごとき旗棹（はたざお）の空を仰ぎながら、カタリカタリと足駄を踏んで、斜めに木の鳥居に近づくと、や！　鼻の提灯（ちょうちん）、真赤（まっか）な猿の面（つら）、

飴屋一軒、犬も居らぬに、杢若が明かに店を張って、暗がりに、のほんとしている。

　馬鹿が拍手を拍った。

「御前様。」

「杢か。」

「ひひひひひ。」

「何をしておる。」

「少しも売れませんわい。」

「馬鹿が。」

　と夜陰に、一つ洞穴を抜けるような乾びた声の大音で、

「何を売るや。」

「美しい衣服（べべ）だがのう。」

「何？」

暗（やみ）を見透かすようにすると、ものの静かさ、松の香が芬（ぷん）とする。

六

鼠色の石持（こくもち）、黒い袴（はかま）を穿（は）いた宮奴（みやつこ）が、百日紅（さるすべり）の下に影のごとく蹲（うずく）まって、びしゃッびしゃッと、手桶（ておけ）を片手に、箒（ほうき）で水を打つのが見える、と……そこへ——

あれあれ何じゃ、ばばばばば、と赤く、かなで書いた字が宙に出て、白い四角な燈(あかり)が通る、三箇の人影、六本の草鞋(わらじ)の脚。

燈(ともしび)一つに附着合(くッつきあ)って、スッと鳥居を潜(くぐ)って来たのは、三人斉(ひと)しく山伏なり。白衣(びゃくえ)に白布の顱巻(はちまき)したが、面(おもて)こそは異形(いぎょう)なれ。丹塗(にぬり)の天狗に、緑青色(ろくしょういろ)の般若(はんにゃ)と、面(つら)白く鼻の黄なる狐である。魔とも、妖怪変化とも、もしこれが通魔(とおりま)なら、あの火をしめす宮奴が気絶をしないで堪(こら)えるものか。で、般若は一挺(ちょう)の斧(おの)を提げ、天狗は注連(しめ)結いたる半弓に矢を取添え、狐は腰に一口(ひとふり)の太刀を佩(は)く。

中に荒縄の太いので、笈摺(おいずり)めかいて、灯(とも)した角行燈(かくあんどん)を荷(にな)ったのは天狗である。が、これは、勇しき男の獅子舞、媚(なまめ)かしき女の祇園囃子(ぎおんばやし)などに斉しく、特に夜(よ)に入(い)って練歩行(ねりある)く、祭の催物の一つで、意味は分らぬ、（やしこばば）と称(とな)うる若連中のすさみである。それ、腰にさげ、帯にさした、法螺(ほら)の貝と横笛に拍子を合せて、

やしこばば、うばば、
うば、うば、うばば。
火を一つ貸せや。
火はまだ打たぬ。

あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ。
やしこばば、うばば。
うば、うば、うばば。

……と唄う、ただそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞わし、太刀をかざして、頤から頭なりに、首を一つぐるりと振って、交る交るに緩く舞う。舞果てると鼻の尖に指を立てて臨兵闘者云々と九字を切る。一体、悪魔を払う趣意だと云うが、どうやら夜陰のこの業体は、魑魅魍魎の類を、呼出し招き寄せるに髣髴として、実は、希有に、怪しく不気味なものである。

しかもちと来ようが遅い。渠等は社の抜裏の、く

らがり坂とて、穴のような中を抜けてふとここへ顕(あらわ)れたが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風(びょうぶ)に繞(めぐ)らした、翠帳紅閨(すいちょうこうけい)の衢(ちまた)がある。おなじ時に祭だから、宵から、その軒、格子先を練廻(ねりまわ)って、ここに時おくれたのであろう。が、あれ、どこともなく瀬の音して、雨雲の一際黒く、大(おおい)なる蜘蛛の浸(にじ)んだような、峰の天狗松の常燈明の一つ灯(び)が、地獄の一つ星のごとく見ゆるにつけても、どうやら三体の通魔めく。

渠等は、すっと来て通り際(しな)に、従七位の神官の姿を見て、黙って、言い合せたように、音の無い草鞋を留(と)めた。

この行燈で、巣に搦（から）んだいろいろの虫は、空蟬（うつせみ）のその羅（うすもの）の柳条目（しまめ）に見えた。灯に蛾（ひとりむし）よりも鮮明（あざやか）である。

但し異形な山伏の、天狗、般若、狐も見えた。が、一際（ひときわ）色は、杢若の鼻の頭（さき）で、

「えら美しい衣服（べべ）じゃろがな。」

と蠢（うごめ）かいて言った処は、青竹二本に渡したにつけても、魔道における七夕（たなばた）の貸小袖という趣である。

従七位の摂理の太夫は、黒痘痕（くろあばた）の皺（しわ）を歪（ゆが）めて、苦笑（にがわらい）して、

「白痴（たわけ）が。今にはじめぬ事じゃが、まずこれが衣類と

もせい……どこの棒杭（ぼうぐい）がこれを着るよ。余りの事ゆえ尋ねるが、おのれとても、氏子の一人じゃ、こう訊くのも、氏神様の、」

と厳（おごそか）に袖に笏（しゃく）を立てて、

「恐多いが、思召（おぼしめし）じゃとそう思え。誰が、着るよ、この白痴（たわけ）、蜘蛛の巣を。」

「綺麗なのう、若い婦人（おなご）じゃい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人（おなご）は、お姫様じゃろがい、そのお姫様が着さっしゃるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものがどこに居る？」

と従七位はまた苦い顔。

七

杢若は筵(むしろ)の上から、古綿を啣(くわ)えたような唇を仰向(あおむ)けに反らして、

「あんな事を言って、従七位様、天井や縁の下にお姫様が居るものかよ。」

馬鹿にしないもんだ、と抵抗面(はむかいづら)は可(よ)かったが、

「解った事を、草の中に居るでないかね……」

はたして、言う事がこれである。

「そうじゃろう、草の中でのうて、そんなものが居るものか。ああ、何（な）んと云う、どんな虫じゃい。」

「あれ、虫だとよう、従七位様、えらい博識（ものしり）な神主様がよ。お姫様は茸（きのこ）だものをや。……虫だとよう、あはは、あはは。」と、火食せぬ奴（やつ）の歯の白さ、べろんと舌の赤い事。

「茸だと……これ、白痴（たわけ）。聞くものはないが、あまり不便（ふびん）じゃや。氏神様のお尋ねだと思え。茸が婦人（おんな）か、おのれの目には。」

「紅茸（べにたけ）と言うだあね、薄紅（うすあこ）うて、白うて、美（うつくし）い綺麗な婦人（おんな）よ。あれ、知らっしゃんねえがな、この位な事

をや。」
従七位は、白痴の毒気を避けるがごとく、笏を廻して、二つ三つ這奴の鼻の尖を払いながら、
「ふん、で、そのおのれが婦は、蜘蛛の巣を被って草原に寝ておるじゃな。」
「寝る時は裸体だよ。」
「む、茸はな。」
「起きとっても裸体だにのう。——粧飾す時に、薄らと裸体に巻く宝ものの美しい衣服だよ。これは……」
「うむ、天の恵は洪大じゃ。茸にもさて、被るものを

お授けなさるじゃな。」

「違うよ。——お姫様の、めしものを持て——侍女（こしもと）がそう言うだよ。」

「何じゃ、侍女（こしもと）とは。」

「やっぱり、はあ、真白（まっしろ）な膚（はだ）に薄紅（うすべに）のさした紅茸だあね。おなじものでも位が違うだ。人間に、神主様も飴屋もあると同一（おなじ）でな。……従七位様は何も知らっしゃらねえ。あはは、松蕈（まつたけ）なんぞは正七位の御前様（ごぜんさま）だ。錦（にしき）の褥（しとね）で、のほんとして、お姫様を視（なが）めておるだ。」

「黙れ！　白痴（たわけ）！……と、こんなものじゃ。」

と従七位は、山伏どもを、じろじろと横目に掛けつ

つ、過言を吐する威を示して、

「で、で、その衣服（きもの）はどうじゃい。」

「ははん――姫様（ひいさま）のおめしもの持て――侍女（こしもと）がそう言うと、黒い所へ、黄色と紅条（あかすじ）の縞（しま）を持った女郎蜘蛛の肥えた奴が、両手で、へい、この金銀珠玉だや、それを、その織込んだ、透通る錦（にしき）を捧げて、赤棟蛇（やまかがし）と言うだね、燃える炎のような蛇の鱗（うろこ）へ、馬乗りに乗って、谷底から駈（か）けて来ると、蜘蛛も光れば蛇も光る。」

と物語る。君がいわゆる実家（さと）の話柄（こと）とて、喋舌（しゃべ）る杢若の目が光る。と、黒痘痕（くろあばた）の眼（まなこ）も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇（むっ）の眼玉も赫（かッ）となる。

「まだ足りないで、燈(あかり)を——燈を、と細い声して言うと、土からも湧(わ)けば、大木の幹にも伝わる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭(やまひる)だ、俺(おれ)が実家(さと)は祭礼(おまつり)の蒼い万燈、紫色の揃いの提灯、さいかち茨(いばら)の赤い山車(だし)だ。」

と言う……葉ながら散った、山葡萄(やまぶどう)と山茱萸(やまぐみ)の夜露が化けた風情にも、深山(みやま)の状(さま)が思わるる。

「いつでも俺は、気の向いた時、勝手にふらりと実家(さと)へ行(ゆ)くだが、今度は山から迎いが来たよ。祭礼(まつり)に就いてだ。この間、宵に大雨のどッとと降った夜さり、あの用心池の水溜(みずたまり)の所を通ると、掃溜(はきだめ)の前に、円い笠を着た黒いものが蹲踞(しゃが)んでいたがね、俺を見ると、ぬう

と立って、すぽんすぽんと歩行(ある)き出して、雲の底に月のある、どしゃ降(ぶ)りの中でな、時々、のほん、と立停(たちどま)っては俺が方をふり向いて見い見いするだ。頭からずぼりと黒い奴で、顔は分んねえだが、こっちを呼びそうにするから、その後へついて行(ゆ)くと、石の鳥居から曲って入って、こっちへ来ると見えなくなった――

俺(おら)あ家へ入ろうと思うと、向うの百日紅(さるすべり)の樹の下に立っている……」

指した方(かた)を、従七位が見返った時、もうそこに、宮奴(みやっこ)の影はなかった。

御手洗(みたらし)の音も途絶えて、時雨(しぐれ)のような川瀬が響く。

……

八

「そのまんま消えたがのう。お社(やしろ)の柵の横手を、坂の方へ行ったらしいで、後へ、すたすた。坂の下口(おりくち)で気が附くと、驚(おど)かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺(しわ)びた、いぼいぼのある蒼(あお)い顔を出して笑った。――山は御祭礼(おまつり)で、お迎いだ――とよう。……此奴(こやつ)はよ、大(でか)い蕈(きのこ)で、釣鐘蕈(つりがねだけ)と言うて、叩くとガーンと音のする、劫羅(こうら)経た親仁(おやじ)よ。……巫山戯(ふざけ)た爺(じじい)が、驚かしや

がって、頭をコンとお見舞申そうと思ったりゃ、もう、すっこ抜けて、坂の中途の樫(かし)の木の下に雨宿りと澄ましてけつかる。

川端へ着くと、薄(うっす)らと月が出たよ。大川はいつもより幅が広い、霧で茫(ぼう)として海見たようだ。流(ながれ)の上の真中(まんなか)へな、小船が一艘(そう)。――先刻(さっき)ここで木の実を売っておった婦(おんな)のような、丸い笠きた、白い女が二人乗って、川下から流を逆に泳いで通る、漕(こ)ぐじゃねえ。底蛇と言うて、川に居(お)る蛇が船に乗ッけて底を渡るだもの。船頭なんか、要るものかい、ははん。」

と高慢な笑い方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺を負（おぶ）って、ざぶざぶと流（ながれ）を渡って、船に乗った。二人の婦人（おんな）は、柴に附着（くッつ）けて売られたっけ、毒だ言うて川下へ流されたのが遁（に）げて来ただね。

ずっと川上へ行（ゆ）くと、そこらは濁らぬ。山奥の方は明（あかる）い月だ。真蒼（まっさお）な激（はげし）い流が、白く颯（さっ）と分れると、大（おおき）な蛇が迎いに来た、でないと船が、もうその上は小蛇の力で動かんでな。底を背負（しょ）って、一廻りまわって、船首（みよし）へ、鎌首を擡（もた）げて泳ぐ、竜頭の船と言うだとよ。俺は殿様だ。……

大巌（おおいわ）の岸へ着くと、その鎌首で、親仁の頭をドンと

敲いて、（お先へ。）だってよ、べろりと赤い舌を出して笑って谷へ隠れた。山路はぞろぞろと皆、お祭礼の茸だね。坊主様も尼様も交ってよ、尼は大勢、びしょびしょびしょびしょと湿った所を、坊主様は、すたすたすたすた乾いた土を行く。湿地茸、木茸、針茸、革茸、羊肚茸、白茸、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵の上を膝で刻んで、嬉しそうに、ニヤニヤして、

「初茸なんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣えているだよ。……さあ、お姫様の踊がはじまる。」

　と、首を横に掉って手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍女（こしもと）は千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗っちゃ、ぞろぞろぞろぞろみんな衣裳を持って来ると、すっと巻いて、袖を開く。裾（すそ）を浮かすと、紅玉（ルビイ）に乳が透き、緑玉（エメラルド）に股（もも）が映る、金剛石（ダイヤモンド）に肩が輝く。薄紅（うすあか）い影、青い隈取（くまど）り、水晶のような可愛い目、珊瑚（さんご）の玉は唇よ。揃って、すっ、はらりと、すっ、袖をば、裳（すそ）をば、碧（あい）に靡（なび）かし、紫に颯と捌（さば）く、薄紅（うすべに）を飜（ひるがえ）す。

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゅうら、ひゅうら、ツテン、テン、おひゃら、ひゅうい、チテン、テン、ひゃあらひゃあら、トテン、テン。」

廓（くるわ）のしらべか、松風か、ひゅうら、ひゅうら、ツテ

ン、テン。あらず、天狗の囃子（はやし）であろう。杢若の声を遥（はるか）に呼交す。

「唄は、やしこばばの唄なんだよ、ひゅうらひゅうら、ツテン、テン、

　やしこばば、うばば、

　うば、うば、うばば、

　火を一つくれや……」

と、唄うに連れて、囃子に連れて、少しずつ手足の科（しな）した、三個（みつ）のこの山伏が、腰を入れ、肩を撓（た）め、首を振って、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなものである。

従七位が、首を廻（まわ）いて、笏（しゃく）を振って、臂（いしき）を廻いた。

二本の幟（のぼり）はたはたと飜り、虚空を落す天狗風。

蜘蛛の囲の虫晃々（きらきら）と輝いて、鏘然（しょうぜん）、珠玉（たま）の響（ひびき）あり。

「幾干金（いくら）ですか。」

般若の山伏がこう聞いた。その声の艶（えん）に媚（なま）めかしいのを、神官は怪（あやし）んだが、やがて三人とも仮装を脱いで、裸にして縷無（るな）き雪の膚（はだ）を顕（あらわ）すのを見ると、いずれも、……血色うつくしき、肌理（きめ）細かなる婦人（おんな）である。

「銭（ぜに）ではないよ、みんな裸になれば一反ずつ遣（や）る。」

価（あたい）を問われた時、杢若が蜘蛛の巣を指して、そう言ったからであった。

裸体に、被(かず)いて、大旗の下を行く三人の姿は、神官の目に、実(げ)に、紅玉(ルビイ)、碧玉(サファイヤ)、金剛石(ダイヤモンド)、真珠、珊瑚を星のごとく鏤(ちりば)めた羅綾(らりょう)のごとく見えたのである。

神官は高足駄で、よろよろとなって、鳥居を入ると、住居(すまい)へ行(ゆ)かず、階(きざはし)を上(あが)って拝殿に入った。が、額の下の高麗(こうらい)べりの畳の隅に、人形のようになって坐睡(いねむ)りをしていた、十四になる緋(ひ)の袴(はかま)の巫女(みこ)を、いきなり、引立てて、袴を脱がせ、衣(きぬ)を剥(は)いだ。……この巫女は、当年初に仕えたので、こうされるのが掟(おきて)だと思って自由になったそうである。

宮奴(みやつこ)が仰天した、馬顔の、痩(や)せた、貧相な中年もの

で、かねて吶(どもり)であった。

「従、従、従、従、従七位、七位様、何(な)、何、何、何事！」

笏(しゃく)で、ぴしゃりと胸を打って、

「退(すさ)りおろうぞ。」

で、虫の死んだ蜘蛛の巣を、巫女の頭(かしら)に翳(かざ)したのである。

かつて、山神の社(やしろ)に奉行(ぶぎょう)した時、丑(うし)の時(とき)参詣(まいり)を谷へ蹴込(けこ)んだり、と告(の)った、大権威の摂理太夫は、これから発狂した。

——既に、廓(くるわ)の芸妓(げいこ)三人が、あるまじき、その夜(よ)、

その怪しき仮装をして内証で練った、というのが、尋常(ただ)ごとではない。

十日を措(お)かず、町内の娘が一人、白昼、素裸になって格子から抜けて出た。門(かど)から手招きする杢若の、あの、宝玉の錦が欲しいのであった。余りの事に、これは親さえ組留められず、あれあれと追う間(ま)に、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮(もくれん)が散るように、幾人(いくたり)となく女が舞込む。

――夜、その小屋を見ると、おなじような姿が、白い陽炎(かげろう)のごとく、杢若の鼻を取巻いているのであった。

大正七（一九一八）年四月

底本：「泉鏡花集成６」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９６（平成８）年3月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十七巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年１月24日発行
入力：門田裕志
校正：高柳典子
２００７年2月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。